

第1回寝屋川市放課後子ども総合プラン運営委員会議事録

1 日時 平成30年7月30日(月) 午後2時から午後3時半

2 場所 議会棟4階 第1委員会室

3 参加者

出席委員 (13名)

杉本委員長・世戸副委員長・屋敷委員・福田委員・川北委員・西田委員

梶井委員・辻本委員・葛城委員・吉岡委員・北西委員・川口委員・川原委員

欠席委員 (2名)

濱委員・青木委員

事務局 (5名)

田中課長・南畑係長・西田係長・山田支援員・高岡支援員

4 次第

○委嘱状及び任命状の交付式

- ・委嘱状及び任命状の交付
- ・社会教育部長挨拶
- ・新委員自己紹介及び委員紹介
- ・事務局の紹介

1. 副委員長の選出 副委員長 (世戸 俊男)

2. 提言書・報告書について

3. 平成29年度運営委員会の経過について

4. 今後の予定議案について (平成30年度)

5. その他

5 会議内容

委員：実行委員会の委託金の見直しについて。生徒数を主とするのではなくプログラム回数による内容（安全管理員の人数、必要物品）を重視して検討されては。

委員：留守家庭児童会において土曜開所がはじまったが、1中学校区に1小学校開催となるため、学校の垣根を越えたプログラム実施において柔軟な組織体制が必要になってくるのではないか。

委員：怪我児童の保険対応や安全管理員の配置・調節等に困惑があった。

委員：平成28年度報告書の中で課題等あったが、進展状況を伺いたい。

事務局：①行政支援の在り方は放課後支援員が各実行委員会へ参画し対応。

②スポーツリーダーズバンクは情報提供中。

③AED研修、コーディネーター研修をそれぞれ8月に予定。

④個人情報について各実行委員会では対応中につき、把握し支援中。

⑤交流会は昨年2回実施。今年度は9月上旬に予定。

⑥事務従事とスキルアップについては放課後支援員が各校を巡回対応。

委員：放課後総合プランは24校になり、各実行委員会の実施情報の共有だけでなく、行政の方向性を示す時期になったのでは。子どもが楽しむ事・安全安心の提供が最優先である。新学習指導要領には「未知の場面で対応する力を身につける」等のキーワードが含まれている。想定外の場면을切り開いていく力をつける事は放課後子ども総合プランでも育める内容であり地域教育でも取り入れられるべきでは。例えば、今年はプールを中止にしている箇所が多い。そこで運営委員会がプランニングを行い、他校の交流を図る（スポーツの対戦型など）。保険の適用、ルールの手配合わせ、安全管理員・外部講師の手配等の課題を行政が支援すれば子どもの楽しみが増える。

事務局：24校が均一になるにはまだまだ未成熟である。社会教育力を向上するために、まずは情報交換を取り組み、寝屋川市在住で良かったと感じていただける運営を目指す。

委員：24校の温度差をどう捉えていくのか、または生かすのかが議論の課題である。学校教育では他市において不慮の事故もありリスクマネジメントを標準化していく事が大事である。

委員長：各実行委員会宛てに6月の地震対策についてアンケート調査が青少年課より届いた。子供教室の開催有無について判断はどこがされたか等。

委員長：リスクマネジメントは2種類あり、1つは予防について、1つは対策についてである。どこが判断すべきなのか等、議論していきたい。

委員：学童には危機管理マニュアルがあり指示系統もしっかりしているが子供教室に置き換えた場合どうなるのか。地震の時は電話も不通である中でマニュアルを作成後には避難訓練等の実施も検討する事になる。

委員：新委員の任用があったので再度プログラムについて伺いたい。

事務局：池田小学校は校庭開放に参加希望の1・2年生が6時間目終了まで過ごす居場所を設置している。堀溝小学校は今年度より総合プランになり、放課後支援員も実行委員会に参画している。6月30日の土曜日開所時に学童はDVD鑑賞会の参加を行なった。他、プログラムとしてスポーツはサッカー・野球・バレー・ドッジボール、放課後学習は宿題・英会話・英検・プリント学習、体験は時季イベント・音楽教室・工作教室など。

事務局：今年度は平成29・30年度版のテーマに沿った議論を集約し報告書を作成する年度となっている。以下、議論いただきたい内容。

- ① 子ども達が社会を生き抜く力（肯定的な気持ちを持つ等）をつけるにはどうしたら良いか。
- ② 各24校の委託金分配基準について
- ③ 各実行委員会が自己評価を行いブラッシュアップする仕組み
- ④ 交流会の位置づけ
- ⑤ 組織の在り方

委員：委託金の内訳及び、柔軟に対応されているのか。

事務局：報償費は8～9割。消耗需用費1割程度である。今年度より備品購入費を追加しており、備品台帳に記入していただく。

委員：放課後の子どもの生活にとって何が大切であるのか。実施回数より評価対象の質を考え、遊びがただの遊びにとどまらないような議論をしていただきたい。